

Title	芸術社会学の基本図式
Sub Title	Fundamental scheme of the sociology of art
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.259- 281
JaLC DOI	
Abstract	The sociology of art is a science which reveals the social structure, social function, and styles of art in relation to social structure, social change, cultural structure, and cultural change. From the sociological point of view, it is convenient to study artistic phenomena in connection with symbol and communication. Studies in the sociology of art may be divided into three parts (1) studies in the social structure of art ; (2) studies in the social function of art ; and (3) studies in the form, motif, and theme of art. The social structure of art consists of the following various elements : artist, critic, public, and artistic groups. Of these problems it is especially important to investigate (1) status and role of artist in relation to public ; (2) types of artist ; (3) status and role of public and critic; and (4) social structure and function of artistic groups as artistic schools or artistic association. I may depict fundamental scheme of the sociology of art as follows:[figure]
Notes	第五十集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0268

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

芸術社会学の基本図式

山 岸 健

- 1 はじめに
- 2 文化の研究と芸術社会学
- 3 芸術の社会構造
- 4 芸術の社会的機能
- 5 芸術の様式
- 6 むすび

1 はじめに

戦後、わが国の社会学は多様な展開をみせているが、他の諸領域に比べて文化の領域に関する社会学的研究は、宗教社会学を除いて、余り進んでいるとは思えない。⁽¹⁾文化社会学は、一面において文化一般についての基礎理論の研究を、また他面においては宗教、芸術、科学その他についての特殊的、実証的研究を進める必要がある。⁽²⁾けれども文化社会学のそれらの重要課題には深く触れず、本稿では文化のうち特に芸術に重点を置きつつ、広く文化と社会の構造と変動の問題を取り上げて、それとの関連において芸術社会学の研究に必要な基本図式を試作してみたいと思う。⁽³⁾

文化の構造と変動は、社会の構造と変動とに深く関連しており、文化の社会学的研究は、いわば、symbolic action の経過とその所産の研究であり、社会関係及び集団の成立と存続における symbol の機能分析が、一つの課題となる。それ故、文化の考察に際しては、symbol それ自体の構造と symbol を媒介とした communication 過程の分析を行う必要がある。⁽⁴⁾文化をその担い手との関連で考察すれば、人々の所属する集団や、地域社

芸術社会学の基本図式

会とそれらの背後にある社会体制が問題となり、さらに社会の構造と変動が文化の構造と変動とにどのように結び付くかが研究課題となる。更にまた社会行動の次元から文化をとらえ、文化の構造と変動に加えて文化の機能をも考察しなければならない。

芸術を社会学の視角で研究するに際しては、まず芸術作品及び芸術行動を symbol を媒介とした現象とみて、symbol, communication の作用から芸術家（制作者、演技者）と享受者をめぐる諸問題を考察する。芸術作品及び芸術行動は、特定の形式を作りつつ制作されたり、演じられるものであり、そこに様式が成立する。それ故、芸術社会学の諸問題は、芸術の社会構造、機能、様式の三領域に区分される。ところで、芸術の中には、絵画、彫刻、文学、音楽、映画、演劇、舞踊、建築などが含まれるから、一般芸術社会学と音楽、映画などのそれぞれの特殊芸術社会学とを区別できる⁽⁵⁾。この一般及び特殊の両芸術社会学は、決して互いに分立するものではなく、両者それぞれの領域において深い考究を進めるとともに、相互依存的関係に立って協力すべきものである。このような点を念頭に置いて、本稿では絵画を主題とする芸術社会学研究の予備段階として一般芸術社会学の基本図式を考案しようとするものである。なお、紙数の制限があるので、芸術社会学に関する既存の研究についての批判、検討は省き、注において出来るだけ多くの参考文献を列挙するに努めた。

注(1) 戦後、発表された文献のなかでは、特に次の文献などが、注目されよう。
難波紋吉著「文化社会学と文化人類学」関書院、昭和23年。
日高六郎著「現代イデオロギー」勁草書房、昭和35年。
作田啓一、品川清治、藤竹暁共著「文化と行動」(今日の社会心理学5)、培風館、昭和38年。

見田宗介「価値意識の理論—欲望と道德の社会学—」弘文堂、昭和41年。

(2) 言語社会学、宗教社会学、知識社会学などの研究業績は、芸術社会学の研究の進展に寄与するところが多い。文化変動の理論を構成する場合にも、まず、技術、知識、芸術などの領域における変動の考察が、要請される。

- (3) 本稿は、昭和41年10月22日、明治学院大学で開催された第39回日本社会学会大会における私の発表と同題であり、本稿の内容は、その時の発表草稿と重なる点がある。本稿の図式は、その際に出席者に配布した図式と根本的には変わっていない。

拙稿、芸術社会学概観，哲学，第48集，昭和41年3月；芸術社会学の諸問題（「米山桂三博士還暦記念論文集」所収，慶応通信，未刊）。

- (4) Cassirer, E., *An Essay on Man—An Introduction to a Philosophy of Human Culture—*, New Haven: Yale Univ. Press, 1944, 「人間」宮城音弥訳，岩波現代叢書，昭和28年。

Langer, S. K., *Philosophy in a New Key*, New York: Penguin Books, 1948, 「シンボルの哲学」矢野他訳，岩波現代叢書，昭和35年。

Ross, R., *Symbols & Civilization—Science, Morals, Religion, Art—* (9. Communication, Symbols, and Society; 11. Art and Its Social Functions), New York & Burlingame: Harcourt, Brace & World, Inc., 1957.

Duncan, H. D., *Communication and Social Order*, New York: The Bedminster Press, 1962.

Bryson, L. edit., *The Communication of Ideas—A series of addresses—* (VIII. Communication and the Arts, Grey, L.; XVI. Popular Art, Bryson, L.), New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1964.

山田宗睦編，コミュニケーションの社会学（福武直，日高六郎監修，現代社会学講座IV），有斐閣，昭和38年。

森好夫，人間と文化，プール学院短期大学研究紀要第6号；シンボリックな相互作用について，人文研究第17巻第5号，昭和41年6月。

- (5) 特殊芸術社会学という名称は、新しい用法であるが、私はここで述べる意味でこれからもこの名称を使用したい。

特殊芸術社会学の一例としては、次の文献が挙げられる。

Silbermann, A., *The Sociology of Music* (translated by Stewart, C.), Lodon: Routledge & Kegan Paul, 1963.

Kracauer, S., *From Caligari to Hitler—A Psychological History of the German Film—*, Princeton Univ. Press, 1947 (Hardback Reprint Edition, 1966).

Huaco, G. A., *The Sociology of Film Art*, New York & London: Basic Books, Inc., 1965.

Duncan, H. D., *Language and Literature in Society—A Sociological Essay on Theory and Method in the Interpretation of Linguistic Symbols; With a Bibliographical Guide to the Sociology of Literature—*, New York: The Bedminster Press, 1961.

Escarpit, R., *Sociologie de la littérature*, 《Que sais-je?》, 1958, 「文学の社会学」大塚幸男訳, 文庫クセジュ, 白水社, 昭和34年.

Duvignaud, J., *Sociologie du théâtre—Essai sur les ombres collectives*, Paris: Presses universitaires de France, 1965.

———, *L'Acteur—Esquisse d'une sociologie du comédien*, Éditions Gallimard, 1965.

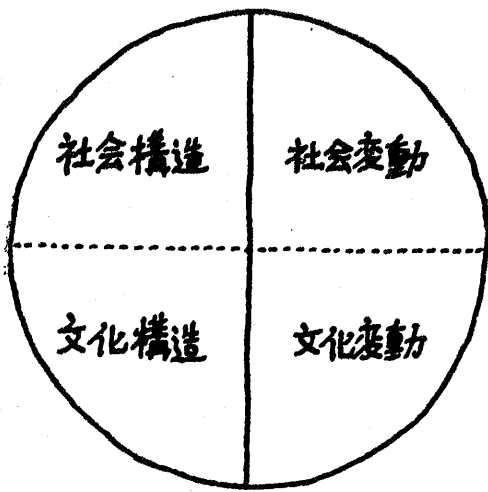
Duncan, H. D., *Culture and Democracy—The Struggle for Form in Society and Architecture in Chicago and the Middle West during the Life and Times of Louis H. Sullivan—*, New York: Bedminster Press, 1965.

佐原六郎, サクソン塔とその社会的背景, 哲学, 第38集, 昭和35年.

2 文化の研究と芸術社会学

社会学の研究は, 周知のごとく, 当初から静学と動学の二部門を含むかたちで行われてきた. この二部門の研究は, いわば, 社会構造と社会変動の研究に該当するものといえよう. 社会構造の研究は, 一般に社会現象の微視的分析に向う傾向を示してきたのに対し, 社会変動の研究は, 社会現象の巨視的分析に近い研究であった. もちろん, 社会の構造は, 固定的なものではなく, 変動することもある⁽¹⁾. 構造と変動に関連する社会現象も変動の過程にあるものとして把握されるべきであろう. 文化現象と社会現象は明確に区分されるものではなく, これらは相互に交叉しているが, 私は, 社会の構造と変動に文化の構造と変動を加え, 第1図の図式を作りたい. 社会変動も実は, 社会文化変動という姿でわれわれの前に現れている. 文化の諸現象も変動の過程にあるものというべきであろう.

ところで, 社会構造の分析にあたっては, まず個人の社会行動を基礎と



第 1 図

してその人々の地位、役割、社会的相互作用、社会化について考察し、彼等の所属集団の規範、構造、機能、他の社会又は集団との関係などに関する考察を行う必要がある。特にこれらの諸点と並んで強調したいことは、世代の問題である⁽²⁾。なぜならば、社会文化変動に関与する世代は、既存文化の伝承、改変などを通じて重要な任務を果すからである。社会構

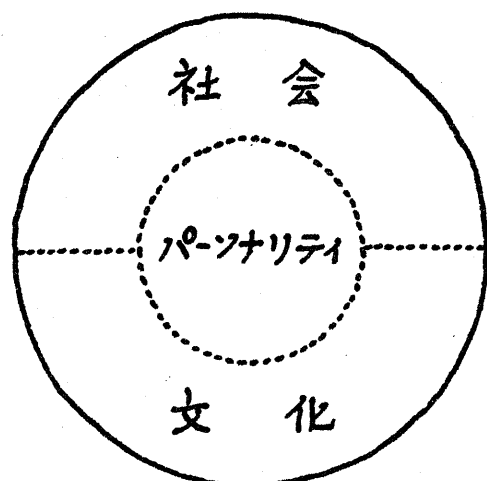
造とは、以上に挙げた諸項目の相互関連性が、下記の特有の原理によって統一されている状況を指すものと考えられる。この特有の原理とは、政治、経済、芸術、宗教その他に広く影響する社会的規範のことであって、文化はこれらの原理を通じて社会構造と連結するのである。

なお、社会、文化の構造と変動を論ずる場合には、人々の所属する国家、民族、階級その他の有する社会、文化の特有性、すなわち、言語、宗教、芸術などの国民的、民族的差異あるいは、価値観、イデオロギー、世界観⁽³⁾など、また、特に歴史と伝統⁽⁴⁾の個人と社会に加える作用をも重視しなければならない。かくて、芸術社会学においても、集団、階級、階層、民族、世代などとの関連で、芸術行動、芸術家の地位と役割、芸術集団の構造と機能、享受者の地位と役割、芸術家と享受者の関係などを考察する。以上のような芸術の社会構造の研究は、芸術の社会的機能の研究及び芸術様式の研究と相互に密接に関連している。

文化構造の分析においては、文化の諸部面（宗教、芸術、言語、知識、科学など）の考察はもちろんのことであるが、これら諸部面の相互関係をとらえながら、さらに文化項目、文化特性、特性複合のメカニズムを考察するとともに、価値、価値意識、イデオロギーの構造を明らかにしなければならない⁽⁵⁾。以上に示した文化の諸部面、諸特性、価値などに変化が起り、

芸術社会学の基本図式

そこに文化上の不安定が生じた時、文化変動が起るものとみてさしつかえない。それは、文化の伝播、接触、変容、生産、創造、発明、発見、流行、模倣などに関連する。芸術の場合には、創造、伝播、変容などが特に注目される。いかえれば、文化構造には、文化の意味、文化の形式と内容、文化の組織、文化の機能などの諸問題が含まれる。社会と文化の構造及び変動を考察する場合に注目すべき点は、以上に要約されるが、実は、社会と文化にパーソナリティを加え、第2図のような図式を描くことが必要とされる。⁽⁶⁾ この場合、パーソナリティは、社会構造の中に位置づけられて



第 2 図

いる行動主体の特性であると同時に文化の担い手たる行動主体の行動を動機づけるものである。従って、このパーソナリティは、社会と文化によって影響を受け、同時に又、社会と文化の形式に作用する。パーソナリティと行動主体は、一体をなしている。それ故に社会文化変動の動因、内容、方向、メカニズムの考察においても、パーソナリティの占める位置に注目したい。

ところで、文化の研究は、哲学、文化人類学、精神分析学、文化史⁽⁷⁾などの分野においても行われてきたわけで、社会学における文化の研究が、これら諸科学の業績に負う所は、少なくない。芸術社会学の研究を進めるにあたっては、以上の諸科学はもちろんであるが、さらに美学（あるいは芸術学）、芸術史学、言語社会学、知識社会学などの研究からその業績を吸収する必要に迫られる。

社会学における文化の研究は、文化社会学の研究としてこれまで行われてきたが、L. Goldmann のいう「精神の社会学」(sociologie de l'esprit) もまた社会学の視角から行われる文化の研究とみられる。

もし、あらゆる感情、あらゆる思惟、つまり、あらゆる人間行動が「表現」であるなら、表現全体の内部に一群の特殊な特権的な「形式」があって、それが行動や概念や想像の面における世界観の首尾一貫した完全な表現を生み出しているのであるから、これを見分けることが大切である。それゆえ、生活にも、思想にも、芸術にも形式があるのであり、この形式の研究は、歴史学者一般の重要な仕事の一つであり、哲学史家、文学史家、美術史家、とりわけ、精神の社会学者の最も重要な仕事⁽⁸⁾なのである。

彼によれば、精神の社会学は、世界観を二つの異なった面で研究できるという。第一は、集団の現実意識の面である。第二は、哲学や芸術の偉大な作品における、また、ある非凡な個性の生活における世界観の首尾一貫した非凡な表現の面である⁽⁹⁾。さらに彼は、精神の社会学の問題として、世界観の類型学という問題を指摘している。

文化の研究における P. A. Sorokin と K. Mannheim の業績は、特に注目される。次に P. A. Sorokin の所説をみよう。彼に従えば、知識社会学 (sociology of knowledge: Wissenssoziologie) の主要な課題の一つは、個人あるいは集団の精神生活の本質的な内容、外形、変形を左右する要因の研究である。

知識社会学、より正確に言えば、精神生活の社会学 (the sociology of mental life) は、次のような一連の基礎的な問に答えようとするのである。ある特定の個人あるいは集団の精神生活は、どのようにして、また、なぜ、たまたま現在のような状態にあるのか、そしてその精神生活は、いかにして、また、なぜ、個人生活あるいは集団生活の過程でしばしば変化するのか、さらになぜ、さまざま⁽¹⁰⁾な個人あるいは集合体の精神生活が、しばしば全く異なっているのか。

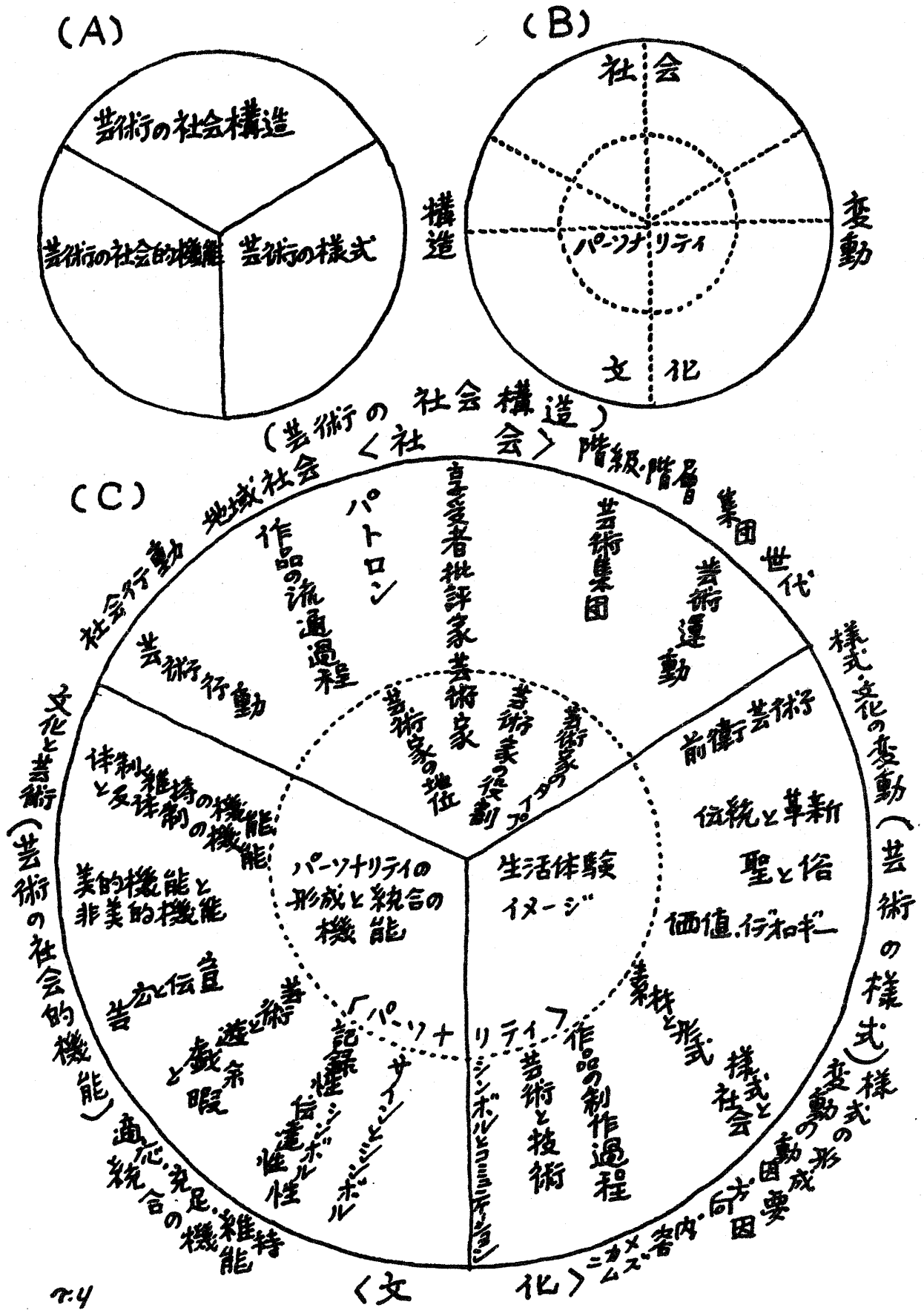
彼はこのような問に説明を与えるために、精神の社会学に二つの部門を設けている。第一は、全体的な文化と社会の精神状態の研究であり (macrosociology of mental life)、第二は、ある特定個人の精神生活の研究である (microsociology of mental life)。彼自身も述べているように、彼の

「Social and Cultural Dynamics」は、巨視社会学の立場で行われた研究であり、彼の自伝ともいふべき「Sociology of My Mental Life」は、微視社会学の観点による精神生活の探索にほかならない。

K. Mannheim の場合は、次のとおりである。すなわち、精神の社会学 (the sociology of the mind) は、行為の文脈における精神的機能の研究であり、いわば、社会的文脈における精神的過程とその意義の研究にほかならない。⁽¹¹⁾ また彼は、文化社会学を symbol を媒介とした行為 (symbolic acts) の社会学的研究とみる。⁽¹²⁾ この場合には、意味と象徴による行為とが、分析の中心に置かれる。彼の文化の社会学的研究においては、文化の創造者である知識階級の生活及び社会全体内での知識階級の位置が論じられる。⁽¹³⁾ いいかえれば、文化社会学の課題は、選良をめぐる諸問題の研究とみられる。選良がいかにして生ずるか、全体としての社会における選良の役割は何か、公衆に対する選良の関係はどのようなものか、こうした問題を彼は研究している。⁽¹⁴⁾ K. Mannheim の知識社会学は、以上のような文化の把握に基き展開されたわけである。

社会的な力は、その活動が認められない程である場合ですら、常に文化の中に現われるのであって、文化と社会が相互に引き離され、かかるものとして互いに反応し合う完全に独立した領域であると思なされるならば、問題の設定自体が既に誤りである。社会的過程は文化的生活そのものの中に含まれており、従ってそれは、一瞬といえども決して社会的な影響から解放されることはない。⁽¹⁵⁾

芸術社会学は文化社会学の一部門である。文化社会学は、文化の構造、機能、変動を社会構造と社会変動との関係において研究する。L. Goldmann の「精神の社会学」、P. A. Sorokin の「精神生活の社会学」、K. Mannheim の「精神の社会学」「文化社会学」は、それぞれ若干の違いはあるにせよ、社会学の観点に立つ文化の研究といえよう。この社会学における文化の研究は、実は、知識社会学、⁽¹⁶⁾ 芸術社会学、⁽¹⁷⁾ 宗教社会学などの研究を通じて実り



第 3 図

のある収穫を成し遂げられるであろう。芸術の社会構造、社会的機能、様式の研究は、文化の構造、機能、変動の研究とともに社会の構造と変動の研究に結び附いている。芸術行動に始まる芸術現象は、パーソナリティ、文化、集団のメカニズムに組み込まれている。第3図は、この状況を図示したものである。次に芸術の社会構造から始めて、順次、芸術社会学の基本図式を述べてみたい。

注(1) 富永健一は、社会構造と社会変動について次のように述べている。

「社会構造とは、制度化された規範による人員配分および所有配分の、持続的なる配置として定義づけられる。」 富永健一、社会変動の理論—経済社会学的研究—岩波書店、昭和40年、253頁。

「社会変動とは、制度化された規範による人員配分および所有配分に、変化を生ずる過程である。」 同書、255頁。

(2) 社会学における世代の研究は、社会構造の研究においても、また、社会文化変動の研究を行う場合にも、大きな比重を占めると考えられる。

文学社会学の研究者である R. Escarpit は、世代現象の事実を一応認めながらも、世代概念の不明確さを指摘し、世代という概念の代りに《組み》という概念を提唱している。(R. Escarpit, 前掲書, 邦訳 49頁-50頁)。

世代は、文化の伝達と創造において、重要な役割を演じている。G. Simmelによれば、諸現象が社会生活によって作り出される仕方は、次の二つに分れる。

「その一つは相互作用をいとなむ諸個人の並存によるもので、これは、個人だけからでは説明できないものを各人のうちにつくり出すのである。もう一つは世代の継起によるもので、世代の継承と伝統は、個人みずからによる獲得と密接に合体するものである。つまり社会的人間は、人間以下のすべての生物とは異なって、たんに子孫であるばかりでなく、相続人なのである。」 Simmel, G., *Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)*, 1917, 「社会学の根本問題—個人と社会—, 阿閉吉男訳, 現代教養文章, 昭和41年, 30頁。

K. Mannheim は、世代現象の領域にみられる基礎的事実として次の五項目を挙げている。

「(1) 文化の新しい担い手がたえず新たに参加してくること (2) 文化の古い担い手はたえず消失すること (3) 各世代関連の成員は、歴史過程の時

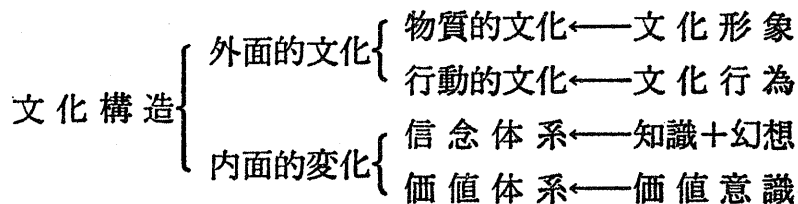
間的に限定された断片に参加しうるにすぎないこと (4) したがって蓄積された文化財をたえず伝達することが必要であること (5) 世代から世代への推移は連続した過程であること。」Mannheim, K., *Das Problem der Generationen*, 1929, 「世代・競争」鈴木広, 田野崎昭夫共訳, 誠信書房, 昭和33年, 43頁。

世代と芸術現象を考察するには, K. Mannheim の上述の文献とともに次の文献も参考となる。

Fischer, E., *Probleme der jungen Generation*, Wien: Europa-Verlags-AG, 1963, 「若い世代の問題—順応か反逆か」佐々木基一他訳, 合同出版, 昭和41年。

日高六郎, 現代イデオロギー, 勁草書房, 昭和35年, 所収, 世代。

- (3) 見田宗介, 前掲書におけるこの点に関する分析は, 芸術現象の分析を行う際に参考となる。
- (4) 芸術運動は, 新しい様式の創造と伝統的様式との対立ないしは伝統的様式の克服という過程で進められる。それ故, 伝統の問題は, 芸術社会学において, 十分考慮すべき問題である。
- (5) 見田宗介によれば, 文化構造と価値体系の関係は, 次のように規定される。前掲書, 199頁。



- (6) F. Znaniecki は social system と cultural system とを中心としてその所説を展開する。文化の研究において, 彼の業績から学ぶべき点は多い。

Znaniecki, F., *Cultural Reality*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1919; *The Method of Sociology*, New York: Rinehart & Company, Inc., 1934; *The Social Role of the Man of Knowledge*, New York: Octagon Books, Inc., Reprinted 1965; *Social Relation and Social Roles—The Unfinished Systematic Sociology*, San Francisco: Chandler Publishing Company, 1965.

社会, 文化, パーソナリティを社会学理論の枠組として設定した文献の中では P. A. Sorokin, K. Young の著作に注目したい。

Sorokin, P. A., *Society, Culture, and Personality—Their Structure and Dynamics—A System of General Sociology—*, New York: Cooper Squ-

are Publishers, Inc., 1962.

Young, K., *Sociology—A Study of Society and Culture—*, New York: American Book Company, 1942, 1949.

K. Young の文献には、芸術を論じた部分がある。21, Play and Esthetic Experience pp. 387-402.

また、T. Parsons の所説も多くの示唆に富んでいる。彼は、expressive symbols と social system の問題を communication の点から論ずる。

Parsons, T., *The Social System*, The Free Press of Glencoe, fifth printing, 1964 (Chapter 1. The Action Frame of Reference and the General Theory of Action Systems: Culture, Personality and the Place of Social Systems, IX. Expressive Symbols and the Social System: The Communication of Affect).

この第四章で、彼は芸術家の役割について論じている。

シンボル体系とコミュニケーションに関しては、彼はこう述べている。

「特に社会的相互作用が行われる所では、サインとシンボルは共通の意味を獲得し、行為者間のコミュニケーションの媒体として作用する。コミュニケーションを媒介できるシンボル体系 (symbolic systems) が現われてきた場合、われわれは、行為の当事者の行為体系の部分となる“文化”の発端について語る事ができる」ibid. p. 5.

- (7) J. Huizinga は、文化史と社会学に関して、次のように述べているが、いづれにせよ、文化の研究を行う場合には、時間の系列においてみられる文化現象を考慮する必要がある。それ故、芸術現象を対象として、ルネッサンスやバロックの社会学を考えてみる事ができる。

「文化史の真の問題は常に形式の問題であり、社会現象の構造と機能の問題なのだ。……民族の歴史、社会集団の歴史から読みとれる限りの多様な文化形式及び機能が文化史の対象である。それは文化的イメージ、主題、論旨、シンボル、理念、思考形式、理想、様式、及び愛情の中に凝縮されている。……奉仕、名誉、忠誠、心服、継承、反抗、自由への戦いなどの文化機能は、個々に取り上げれば、社会学の対象だと称してかまわない。しかし、社会学が行う体系的研究にしても、もし文化史が、時代と国を越えて時と共に変化するその作用と形態を見きわめないならば、それを決定的に取扱うことは出来ない。Huizinga, J., *De taak der cultuurgeschiedenis*「文化史の課題」里見元一郎訳、東海大学出版会、昭和40年、55頁-63頁。

- (8) Goldmann, L., *Sciences Humaines et Philosophie*, Paris: Presses Universitaires de France, 1952, 「人間の科学と哲学」清水幾太郎他訳, 岩波新書, 昭和34年, 150頁-151頁.
- (9) 同書, 152頁.
- (10) Allen, P. J. edited, *Pitirim A. Sorokin in Review*, Durham, N. C.: Duke University Press, 1963 (Part One, P. A. Sorokin, *Sociology of My Mental Life*, p. 3).
- (11) Mannheim, K., *Essays on the Sociology of Culture*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1956, p. 88.
- (12) *ibid.*, p. 58.
- (13) Mannheim, K., *Man and Society in an Age of Reconstruction—Studies in Modern Social Structure—*, 1940. 「変革期における人間と社会」福武直訳, みすず書房, 昭和37年, 95頁.
- (14) マンハイム「変革期における人間と社会」邦訳 115頁.
- (15) 「変革期における人間と社会」邦訳 93頁.
- (16) 知識社会学研究の一例として次の研究を挙げておきたい。
横山寧夫, 知識と社会体制, 哲学30輯31輯; パロックの知識階層, 哲学32輯; 知識人の概念と類型, 哲学第37集; 保守と社会構造, 哲学第41集; 神秘主義の社会学—Meister Eckhart とその時代—, 哲学第47集.
- (17) 宮家準, 宗教の社会学 (米山桂三編著, 現代社会の社会学, 世界書院, 昭和41年, 所収)

3 芸術の社会構造

芸術の社会構造の考察にあたっては, 第一に芸術行動を研究の出発点とし, 次に芸術家と享受者の地位と役割を考察し, この地位, 役割との関連において, 芸術家と享受者の関係を見て行くのである。また, 芸術家と享受者の芸術集団を考察し, 芸術集団の構造と機能を他集団との関連で研究し, さらに芸術集団の成立, 発展, 解体などの過程を明らかにしなければならない。芸術行動から芸術集団にわたる一連の社会文化現象としての芸術現象は, 一方では, 階級, 階層, 世代などと, また他方では, 宗教, 経⁽¹⁾済, 政治, 教育などの諸現象とも深く結び附いている。

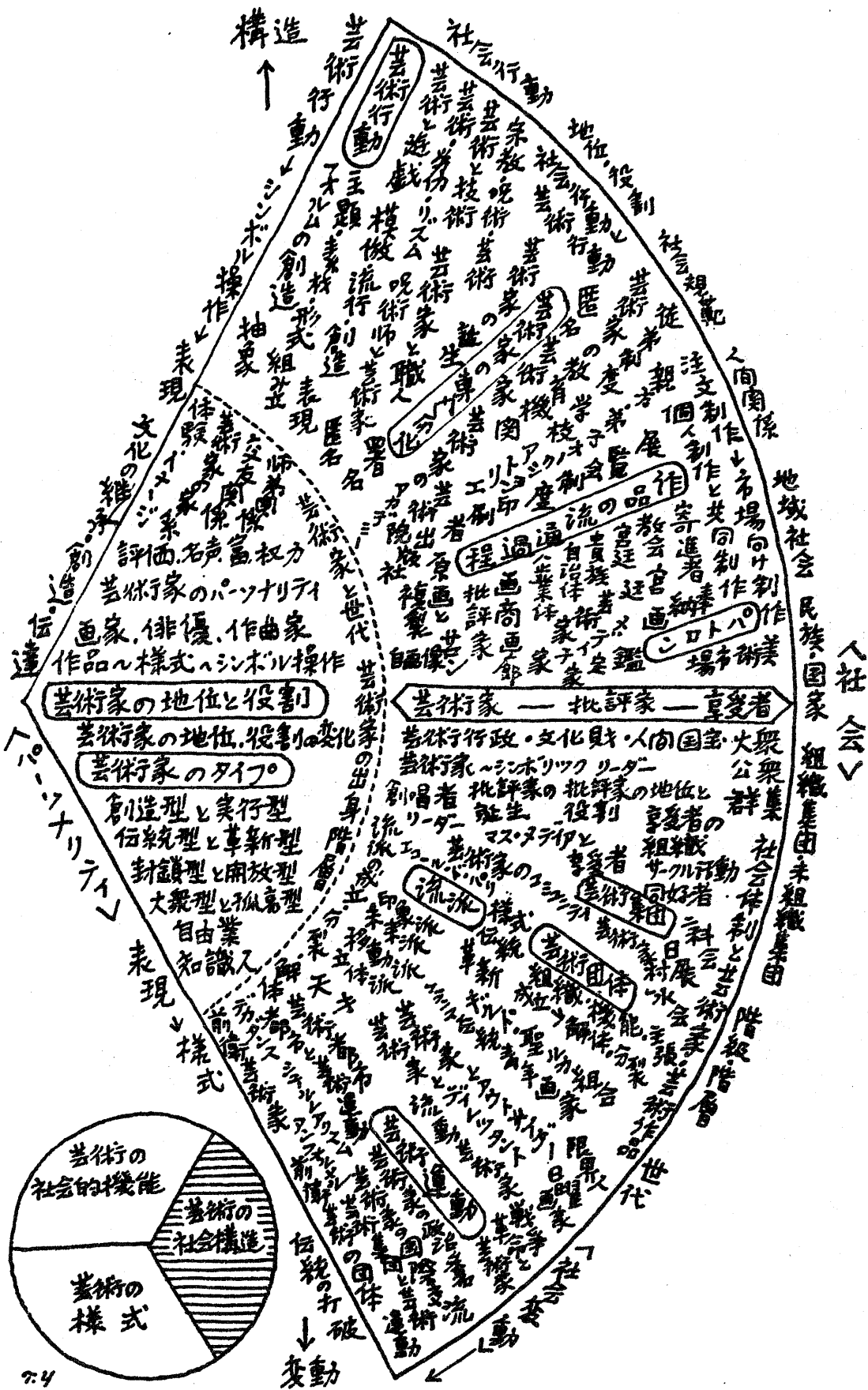
芸術は、制作、演技、享受の行動の過程そのものの中に意義を有し、芸術行動は、通常、芸術家と享受者の関係において営まれる symbolic action である。しかし、芸術行動には、美的機能のみならず、非美的機能の面も認められ⁽²⁾、後者の場合には、芸術行動が別の目的を達成するための手段として行われる。このことは、例えば、営利的経済行動や勸善懲惡的道德行動などとの比較によって鮮明となる。

芸術行動は、色彩、形態、量塊、身体、音、言語、映像などにおいて、一定の意味内容又は symbol を伝達する表現活動である。この活動において、芸術の社会的機能が営まれる。芸術社会学は、シンボルとしての作品の制作、上演、享受などの過程を問題とするが故に芸術家を規定して、次のように述べることができる。

すなわち、芸術家とは、シンボルを操作して、自己の生活体験あるいはイメージを一定の形式で表現し、その作品を媒介として、享受者との交流をはかり、享受者の生活経験の深化と拡大を意図する知識人の一類型である。あるいは、次のように芸術家を規定できるだろう。芸術家は、シンボルとしての作品の創造、伝達によって享受者との交流をはかり、それによって、なんらかの社会的評価の対象としての価値を創造する人である⁽³⁾。

絵画の分野では、芸術家の地位と役割が、たんに一般享受者との関係においてのみならず、パトロン、画商、展覧会制度などによって影響されることもある。このような複雑な関係についての考察は、別の機会にゆずりたい⁽⁴⁾。なお、芸術家のタイプの考察も必要である。わが国でみられる文壇、画壇、俳壇に関する研究も必要であろう。

芸術家の集団は、流派ないしは団体（結社）というかたちでみられるが、これらの研究に際しては、芸術運動との関連で考察する必要がある。この芸術運動は、特定のリーダーを中心として組織され、これまでの新しい様式の創造は、前衛運動として営まれた例が多い。ここに様式上の伝統と革新の対立が生ずる。芸術行動あるいは芸術運動が、政治的色彩を



第4図

帯びる場合もあり、芸術家の政治参加も問題となる。

芸術家は、O. E. Klapp のように symbolic leader となり、未組織状態にある人々の symbol としての位置を占めることもある。⁽⁵⁾ G. Tarde は、芸術群集、芸術公衆のごとき芸術上の未組織集団に関する考察を行っている。⁽⁶⁾ また、F. Znaniecki は、社会的役割と演劇上の役割を比較しながら、俳優と戯曲について論じ、さらに画家を中心とした集団に関する考察を行うとともに役割—機能の関連に基き、芸術家の機能を述べている。地域社会と芸術に関しては、彼の挙げた intellectual metropolis に注目したい。⁽⁷⁾ これまで、ある特定の都市は、芸術運動ないしは、芸術家の活動の舞台となり、文化の創造と伝達の拠点として発達してきたのである。以上に列挙した芸術の社会構造の諸側面を構造と変動の軸と社会、文化、パーソナリティの関係を基礎として作図すると、第4図の図式となる。

注(1) Galbraith, J. K., *The Liberal Hour*, Boston: Houghton Mifflin Company, 1960「自由の季節」鈴木哲太郎訳、岩波書店、昭和36年(経済学と芸術、邦訳 56頁-79頁)。

Kavolis, V., *Economic Correlates of Artistic Creativity* (The American Journal of Sociology, vol. LXX, november, 1964, pp. 332-341)。

芸術現象と経済現象の関連については、マルクス主義の視点に立つ諸理論を参照せよ。K. Marx, F. Engels, G. V. Plekhanov, V. M. Fritche などの研究に注目したい。

(2) Gotshalk, D. W., *Art and the Social Order*, New York: Dover Publications, Inc., 1962, pp. 156-163.

(3) 芸術家の問題は、知識人の問題として論じられることが多い。K. Mannheim の「変革期における人間と社会」、C. W. Mills の「ホワイト・カラー」、T. B. Bottomore の「エリートと社会」などにもこれらの問題の分析が、うかがわれる。

拙稿、芸術社会学の諸問題、前掲を参照せよ。

(4) 通史としては、A. Hauser の研究が注目される。

Hauser, A., *The Social History of Art*, 4 vols., London: Routledge & Kegan Paul, 1962「芸術の歴史」高橋義孝訳、全3巻、平凡社、昭和33

年.

芸術家と享受者についての文献の一例を挙げれば、次のとおりである。

Bruford, W. H., *Chekhov and His Russia—A Sociological Study—*, London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1947.

Coser, L. A., *Men of Ideas—A Sociologist's View—*, New York: The Free Press, 1965.

Harbage, A., *Shakespeare's Audience*, New York: Columbia Univ. Press, 1961.

- (5) Klapp, O. E., *Symbolic Leaders—Public Dramas and Public Men—*, Chicago: Aldine Publishing Company, 1964, pp. 22-23, pp. 42-52, p. 262.

彼は、ビートルズと十代についても述べている。ibid. p. 261~262.

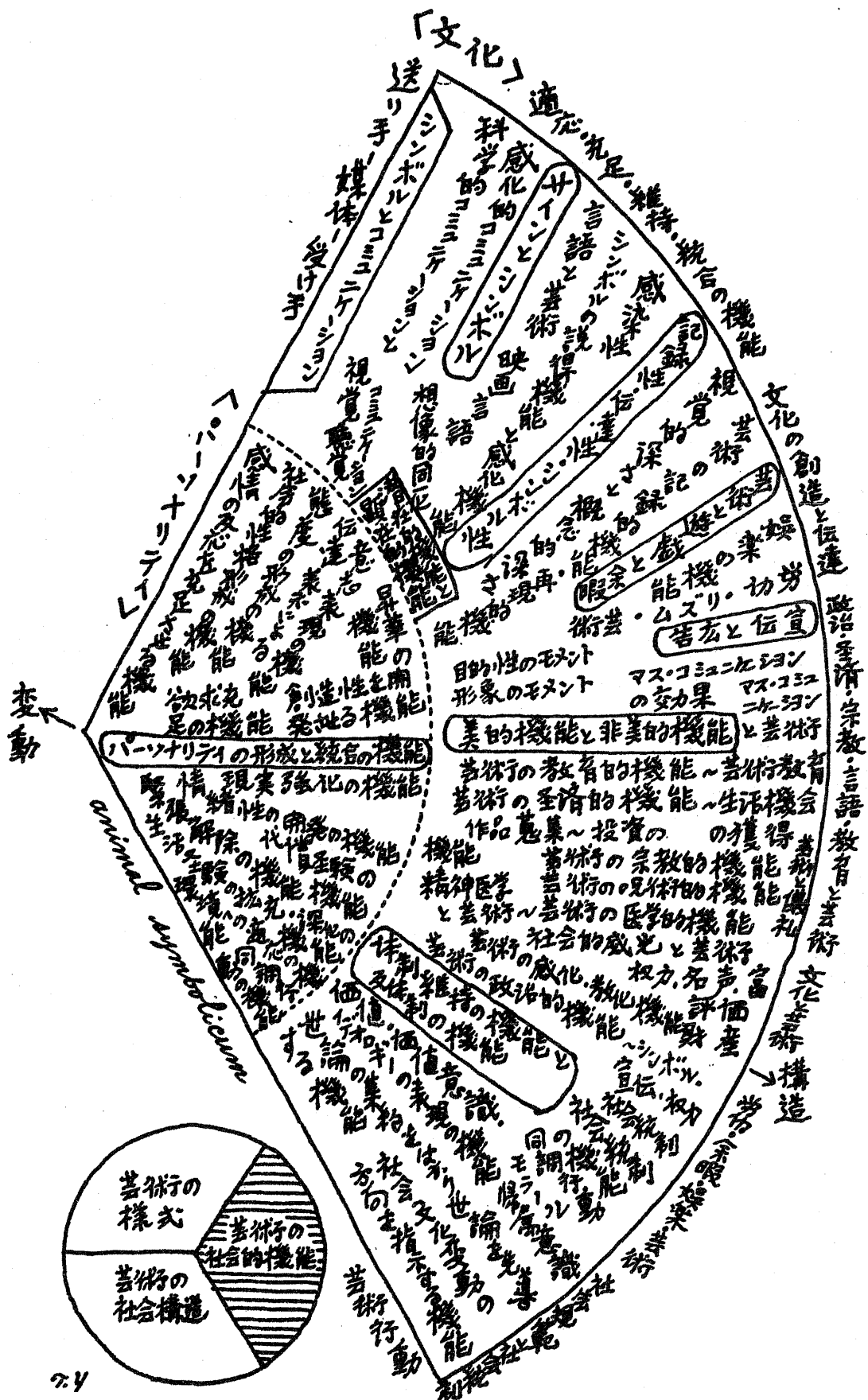
- (6) Tarde, G., *L'Opinion et la foule*, 1901, 「世論と群集」稲葉三千男訳, 未来社, 昭和39年.

同書にみられる彼の見解は示唆に富んでいる。

- (7) Znaniecki, F., *Social Relations and Social Roles*, San Francisco: Chandler Publishing Company, 1965, pp. 203-206, p. 227, pp. 286-287, intellectual metropolis~pp. 41-43.

4 芸術の社会的機能

文化の機能として適応, 充足, 統合, 維持の機能を挙げることができるが, これらの機能は, そのまま文化の一部門たる芸術の場合にも認めることができる。パーソナリティの自然環境, 社会環境への適応の機能は, 芸術の場合は, 芸術現象にみられるシンボルの記録性, 伝達性を中心に展開される。充足の機能は, パーソナリティの欲求の充足と情緒的安定において認められ (想像的同一化, 代償経験, 昇華), 統合の機能は, シンボルの説得機能と感化機能などで代表され, 統合の機能によって, パーソナリティは集団への帰属感, 連帯感を喚起される。T. Parsons のいう社会的相互作用のパターンの維持が, 維持の機能であるが, これは, 芸術の教育的機能などに認められる。いずれにせよ, 芸術の諸機能は, パーソナリティ



第 5 図

の形成に関連する機能とパーソナリティの統合、情緒的安定の機能に分けられるが、他方では、芸術の諸機能は、パーソナリティの環境への適応を可能にすることによって集団の統合と存続を達成させ、さらに文化の創造と伝達を容易にさせるのである。⁽¹⁾ 以上を中心として芸術の社会的機能を図式化すると第5図となる。なお、芸術行動は遊戯行動との比較において論じられることが多い。芸術の社会的機能を考察するに際しても、遊戯行動に関する研究を排除するわけにはゆかない。

注(1) 芸術の社会的機能に関する文献の一例を挙げれば、次のとおりである。

Gotshalk, D. W., op. cit.

Mukerjee, R., *The Social Function of Art*, New York: Philosophical Library, 1954.

Ross, R., op. cit., *Art and Its Social Functions*, pp. 211-238.

McFee, J. K., *Preparation for Art*, San Francisco: Wadsworth Publishing Company, Inc., 1961, *Functions of Art in Culture*, pp. 20-27.

Duncan, H. D., *Communication and Social Order*, New York: The Bedminster Press, 1962, *The Social Function of Art in Society*, pp. 373-428.

高階秀爾, 芸術の人的機能, 「世界」第243号, 昭和41年1月。

5 芸術の様式

芸術の様式を社会学の視角で研究する場合には、従来行われてきた美学、美術史学の研究における様式に関する所説を考察しなければならない。社会、文化の構造と変動との関連で芸術様式を研究するに際しては、様式を価値、価値意識、イデオロギーとの関係において考察する必要がある。あるいは、世界観との関係で様式を研究する方法もみられる。イデオロギー、社会的性格という角度から様式を研究することも出来る。文化現象としての様式変動の動因、内容、方向、メカニズムの分析が、研究の主眼となる。



第 6 図

Paul Zucker は、様式を形成する要因として、時代、土地柄、社会的政治的体制、宗教的あるいは文化的精神運動、素材と技術の五項目を挙げているが、⁽¹⁾ 様式を形成する要因の分析は、これに尽きるわけではない。いずれにせよ、様式は素材、技術、経験とイメージが多元的な要因と結合して形成されるものであり、様式の形成と様式の変動、さらに様式の類型を、芸術行動、芸術集団、芸術の社会的機能との関連において研究しなければならない。進歩的芸術行動は、前衛芸術の様式を創造するが、様式は、通常、過去の様々な様式からなんらかの点での影響を受けるものであり、様式相互の関係を考慮する必要がある。それ故、様式の研究においては、様式を芸術行動、芸術集団、芸術の社会的機能の系列から考察する方法と、様式と様式の相互関係から考察する方法とが、併用されなければならない。様式の変動を考察する場合は、様式を伝播、変容、模倣、流行などの角度からも研究する必要がある。以上のような段階を踏むことにより、様式の研究は、文化の構造と変動の研究に組み込まれるだけでなく、さらに社会の構造と変動の理論とも結び附くのである。

社会学者による様式研究では、第一に P. A. Sorokin の ideational art, idealistic art, sensate art の理論が注目される。⁽²⁾ これは彼の〈精神生活の巨視社会学的研究〉の過程で、産み出されたものである。私のみるところでは、芸術の様式は、伝統と革新、聖と俗を軸として種々なるタイプに分類できると思われる。様式の変動を考えるには、前衛芸術運動とその様式に特に注目したい。⁽³⁾ 以上を基礎として芸術の様式を図式化すれば、第 6 図となる。

注(1) Zucker, P., *Styles in Painting—A Comparative Study—*, New York: Dover Publications, Inc., 1963, pp. 6-10.

(2) Sorokin, P. A., *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols., New York: American Book Co., 1937-41; *Society, Culture, and Personality: Modern Historical and Social Philosophies*, New York: Dover Publications, Inc.,

1963; *The Basic Trends of Our Times*, New Haven, Conn.: College & University Press Publishers, 1964.

芸術に対する Sorokin の関心が、彼の生活体験に基づいて形成されたことは、興味のある事実で、彼の芸術理論を解明する一つの鍵が、ここにある。前掲の「Sociology of My Mental Life」を参照せよ。

家坂和之、ソローキンにおける人間の研究、文化、第29巻第3号、昭和40年12月。

様式に関する文献の一例は次のとおりである。

Kroeber, A. L., *Style and Civilizations*, Ithaca, New York: Cornell Univ. Press, 1957.

Hauser, A., *The Philosophy of Art History*, New York: Alfred A. Knopf, 1959.

Rothschild, L., *Style in Art—The Dynamics of Art as Cultural Expression—*, New York: Thomas Yoseloff, Publisher, 1960.

Huaco, G. A., *The Sociology of Film Art*, New York: Basic Books, Inc., 1965.

品川清治、芸術行動、「文化と行動」今日の社会心理学5、培風館、昭和38年所収。

- (3) Greenberg, C., *Art and Culture*, 1961, 「近代芸術と文化」瀬木慎一訳、紀伊国屋書店、昭和40年。

なお、Greenberg と針生一郎の対談「現代文明のなかのアメリカ美術」(「世界」第255号、昭和42年2月)も参考となる。

6 む す び

芸術社会学の研究を行う場合、第一に心掛けるべき点は、社会学の理論に芸術現象の理論をどのようにして組み込むかということである。芸術現象は、パーソナリティとの関連において研究されるのみならず、文化と社会の構造、変動との関連においても研究される。われわれは、芸術の社会構造の研究において、芸術行動の分析から始め、シンボルの創造⁽¹⁾と享受の主体の地位、役割を基礎とし、芸術家と享受者の関係を考察するとともに芸術家、享受者の集団の構造と機能を明らかにし、芸術の社会的機能と様

式がどのように社会構造と関連しているかを明らかにしなければならない。芸術現象は、symbol を媒介とする communication 活動によって生ずる意味の世界であり、それは、集団、階級、階層、民族、世代との関連において、研究されるものである。symbol の創造から享受にいたる一連のメカニズムは、以上の図式によって明らかとなる。芸術の社会的機能は、パーソナリティと集団の両側面において種々なる機能に分けられる。いずれにせよ、この機能は、芸術の社会構造によって左右されるが、さらに、芸術の社会構造、ひろくは、社会、文化の構造には芸術の社会的機能によって支えられる側面もみられる。芸術様式は、世界観、価値意識、イデオロギーなどの表出であり、伝統と革新、聖と俗という基本原理をめぐり、芸術の社会構造、社会的機能との相互関係の下に種々なる様式が現れる。

私は、以上において、芸術の社会構造、社会的機能、様式の基本図式を作成することにより、芸術現象の理論を社会、文化、パーソナリティの基礎理論と接続させる青写真を描いてきた。芸術社会学の研究は、以上の図式を基礎として展開されるのである。(1967年1月26日)

- 注(1) Nahm, M. C., *Genius and Creativity—An Essay in the History of Ideas*—, New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1965.
 Storer, N. W., *The Social System of Science*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966, chapter 4~Creativity from a Sociological Standpoint, pp. 57-74.

※ 芸術社会学の研究に関する文献は、拙稿、芸術社会学概観（哲学、第48集、昭和41年3月）の末尾に記載されている。